りらくインタビュー

菊地茂

（シャローム行政書士事務所代表
NPO法人シャロームの会理事長）

行政書士の仕事の中で出会った縁から精神障がい者の就労支援活動を行うことに。互いに認め合い、豊かな人生を築く場をもっと広げたいと夢を描いている。

行政書士の仕事をする中で精神障がい者と出会い、就労支援のためのNPO法人を作った菊地茂さん。障がいのある人もない人もシャローム（ヘブライ語で平和、平安、大丈夫といった意味）といえる社会を自分たちで作っていこうと活動している。

―菊地さんは農家の跡継ぎという立場を振り切って行政書士事務所を開いたそうですね。

東北学院大学法学部を出て松島町役場に勤めました。農家の長男なのでそのまま兼業農家で一生過ごすはず、というプレッシャーに抵抗があり、昔から別な人生があるんじゃないかと夢を持っていたんです。それで31歳で役場を辞め、塩釜のキリスト教関係の幼稚園に勤めました。将来牧師になろうかなどと思って。でもあまり人間関係がうまくいかず1年余りで辞め、次は自分を変えなければいけないという思いもあって全然違う民間の建設会社に転職しました。そうしたら休日も関係ない飛び込みの営業です。でも結構面白くて、私のような者でも仕事が取れましたが、これは独立を目指して資金を貯めるためでした。資格は大学時代に取っていましたので、資金ができた35歳の時に事務所を開くことができました。現在、会社の許可申請などの経営法務の他、高齢者や障がい者の方々の財産管理や法律相談などの福祉法務、外国の方の入国管理や帰化手続きなどの国際法務にも力

精神障がい者と共にある喜び。ワイワイと一緒に働き、自分も人もそのままでオーケーと気づいていく環境づくり。

を入れています。

—精神障がい者の方々の支援をすることになったきっかけは。

7年前、大学時代の恩師が老後の財産管理の相談にいらしたのですが、その時、心の病で引きこもりがちな娘さんのお話を伺いました。学生の時よくお宅に遊びに行き、小学生だった娘さんをよく知っていたので何とかしてあげたいと思い、調べてみたら職親（しょくおや）制度というのがありました。これは、一般の事業所が仙台市から委託を受け精神障がいの方を受け入れて訓練し、就職に結びつけようという制度です。それで、娘さんに週1回でも来て働いていただければと思い、職親として登録しました。その娘さんは結局来れなくて、別な女性が職親制度の第1号になりました。うちは小さい職場なので枠としては1～2人です。もっときめ細かく対応できればいいなと思い別組織を考えるようになりました。

—そしてNPO法人設立となる訳ですが、参考にしたのが「べてるの家」だそうですね。

2003年にNPO法人を設立しましたが、その前に北海道浦河町にあるべてるの家を見学してカルチャーショックを受けました。日赤浦河病院が中心にあり、医者の川村敏明先生とケースワーカーの向谷地生良さんらがサポートし、退院された方や通院している方が自分たちで会社を立ち上げたんです。始まったのは20年ほど前ですが、地元の日高昆布を売ったり、店やグループホームを作ったりいろいろな事業を行って、年商1億円にもなっているそうです。話を聞くと、働く人が安心して休めるというんです。本音を言える関係を作っているということですね。運営するのは入退院したり薬を飲んだりしている人たちです。私たちも風邪薬を飲んだだけで眠くなりますよね。そういう状態で働くんですから大変です。だから安心して休めないとね。でも仕事を始めることによって、人との関わりができてピリッとする、自分が変わっていくということでした。そんな会社が実際にあることが驚きでしたね。今私たちがやっているのは、べてるの家からアイディアをもらって考えたことです。

—そこで、小規模作業所「アトリエぶどうの木」と喫茶店「太陽とオリーブ」を作ったのですね。

NPOのスタッフは4人、精神障がいのメンバーは30人ほどいます。アトリエぶどうの木では、お米や果物など農水産物のギフト販売、ドールハウス作りを行っています。ドールハウスは家内の趣味ですが、その先生に教えていただいて、二十人町にある古いお店をミニチュアで再現しています。昭和の雰囲気が懐かしくていいですよ。これは太陽とオリーブに飾ってあり

シャローム行政書士事務所にて。

**欧米で障がい者をチャレンジドと呼ぶようになったそうです。
神様から挑戦すべきことを与えられた人なんです。
希望に満ちた響きですね。**

ますから是非見て下さい。店では有機コーヒーやケーキなどの他に、おにぎり、玄米カレーなどを出しています。お米は豊里町、野菜は桃生町の農家の方から減農薬栽培のものを直接仕入れていますし、塩は石垣島の自然海塩を取り寄せています。いい食材を使った美味しいメニューですよ。

ここでは、NPOのスタッフと精神障がいのメンバーが協力して料理や皿洗い、接客、レジと二生懸命仕事をしています。メンバーは根本的に病気であることは変わらないんですが、でも病気の自分を受け入れながら仕事ができるんです。今は、休みたいとか寝たいとか本音を言ってくれるので、信頼されているのかなと思っています。

―支援のためにどのような関わり方をなさっているんですか。

会のメンバーには、ずっといい子で生きてきて、自己主張はリストカットしかなかった人、交通事故で人を死亡させてしまい病気になった人、結婚してDVを受け病気になった人などがいます。自分はだめだという思いを抱え、それでも何十回もハローワークに行き、断られて働く所がないという形でここに来ています。そういう人と一緒にやっていこうとすると、私も自分を見つめることになりました。予定を組んでもその通りに来れなくて休むことも多い。私は最初それでは社会に通用しないと思ったので厳しく言っていたこともありました。でも彼らはできないんだということを理解するようになりました。病気の自分はだめで、健康な自分はいいという捉え方だと、今弱い状況にある人を否定することになります。それは自分に対しても、強い自分しか認めないということです。自分は弱くていいんだということが分かって、彼らを受けとめることができた気がします。例えば、私は行政書士の仕事もあるので彼らの職場にあまり顔を出せないんですが、それをメンバーから批判されてカチンときたり、こんなにやってあげているのにという思いが出てきたりして、こういう自分もあると知らされました。どういう段階にいても人間はそのままでいいんですね。病気で苦しんでいるメンバーが来たら、あなたは素晴らしい人生になりますよと私は言い続けるし、本人も人と比べないでこれでいいと思えればそうなっていきます。メンバーの1人はバロメーターが薬の量で、減らすのがいいことだと考えて努力したんですが、ここに来てその思いからも解放されたと言っていました。今悩んでいる人にはなかなか解ってもらえませんが、一緒に働くことが寄り添うことですから、ワイワイやっていくのが一番かなと思っています。

「太陽とオリーブ」のおいしい玄米カレーセット。スープ、サラダ、ヨーグルトデザートがついて¥700。

―人との関係、自分との関係には誰でも悩むものですね。

自分を見つめていないと、自分の本音がわからず建前だけで生きて辛くなります。人を殺したいとかムカつくというのは誰でも思うことで、それを客観的に見たり口に出したりできれば行為までいきません。本音を殺してしまうと、極端にいえば幻覚、幻聴まで行く訳です。ずっと私たちは、そのままでいいと言われてこなかったですね。人の評価を気にして気が休まらない人生です。テストの成績、会社での業績、家族の中でも比べられて。だから問題が起きるんですね。でも加害者は被害者で、親もその親もいわれてきました。それを断ち切るのは誰か。自分しかいないんですね。今をプラスだと思うと過去も未来もプラスになります。今はだめだけど将来頑張ろうではなく、今をOKにすること。自分の思いが自分の人生を作るんですから。習慣的に言っている

プレゼントは「贈り物」「現在」という2つの意味があります。与えられた今この時が最高であると常に心に刻んでいます。

アトリエぶどうの木でドールハウスづくりに励むメンバー。

言葉がその人の人生です。「貧乏ひまなしで」と言っていれば、そういう人生を選択している訳です。私は素晴らしいと言っていれば、素晴らしい人生になります。思いは選択ですから、すぐできることは自分の思いと言葉を変えることです。自分を変えると過去も他人も違って見えてきますよ。批判されてもありがとう、褒めてもらってありがとうです。病気になった人は幸いです。いい人生を送るためのきっかけだったと捉えた会のメンバーは元気になり、豊かになっていますから。瞑想や祈りとともに、人との関係の中で人は成長するものでしょう。

―こうした活動に取り組む背景にはキリスト教の信仰があるのですか。

学院大はキリスト教精神の学校ですし、米沢興譲教会の田中信生先生との出会いがありまして、それでNPO法人立ち上げに踏み切ったようなものです。5年ほど前、教会員の方が会社を設立し、英会話の先生を外国から呼ぶため仕事を頼まれたことから先生を知りました。田中先生は、生活に根ざして、人生をどう楽しく豊かに生きるかということをテーマに聖書を読むという方です。キリスト教は愛の神様と言いながら戦争も人殺しもあるじゃないかといわれますが、神様は人間を自由な主体として作りました。自分で決断して生きる自由です。そして私たちを救うためイエス・キリストを使わしたのです。ですから私たちはそのままでいい、そのままで悔い改めればいいんです。というと、人間は自由をはき違えるんじゃないかといわれますが、本当に認められたら、人のために生きるという心が出てくると思うんです。その自由をどう生かすかが人間の課題です。

田中先生の説教に小学校の先生から聞いた話としてこんな例があります。ある子どもが給食をよそっていると足を踏まれた。すると踏まれた子が謝った。なぜそうするのか家庭訪問の時に母親に聞いてみると、キリスト教の信者で、人間関係をよくするには、絶対正しくても自分が低くなることによってそのクラスや社会が豊かになるといったそうです。その考え方を田中先生は教えています。水は低い所に流れますが、同じようにチャンスとか祝福は低い所に流れます。仕事上でも、こんな仕事で悪いけどといわれる仕事を心からさせていただくという気持ちになると、チャンスが流れてくる気がします。これはいや、あれはだめといっていると愚痴ばかりですが、頭を低くすると来るものは全部いいものばかりになりますよ。人間関係は自分が低くなれるかどうかで決まりますね。宗教というのは心を解放するものです。田中先生からそういうお話を聞いて、私は元気づけられています。それをここで生かせるか、いつも問われていると思っています。

―いずれはメンバーが自主運営することになりそうですね。

障害者自立支援法ができて今年から制度が変わり、施設と利用者が対等に契約を結ぶ形になります。今までは区別していなかった施設を、働く場か生活の場か入所施設かを明示してきちんと運営しなさい、そして働

「太陽とオリーブ」の店内。NPOスタッフとメンバーが楽しく働く。
（仙台市若林区新寺2-3-1　TEL.022-299-0435）

私の好きな言葉
変えられないものを受け入れる心の平安を
変えられるものを変える勇気を　そしてその違いを見極める知恵を

く場では工賃を出し、利用者からは利用料を取りなさいということです。最終的には地域で自立しなさいというのが今回の改正の目的です。私は自立というのは、自信を持って生きることだと思います。自信とは人と比べないで生きること。そして等身大の自分を認めて、自分で自分を励まし続けること。人に励ましてもらわないとだめなら甘えることになります。このままの自分でOK、病気の自分もOKと思わないと自立は難しいですよね。うちは、喫茶店が働く場ですが、普通の会社の採算とはかなり違うので、生産性をどう上げて、工賃を差し上げるためのノウハウをどう構築していくかが課題です。4月からいろいろ工夫しないと大変です。サポートしてくれる仲間を増やすためにいろいろな場で講演し、仕事の取引先にもお話しています。今後10年間は今の状況で進み、後はメンバーが中心になってやっていけるようにしたいですね。そうなれば社会も変わっていくだろうと思います。私は精神障がいの人たちにもっときめ細かく関わるために、今年末に大学に入ります。精神保健福祉分野を通信教育で2年ほど勉強しようと思っています。夢を描くというのはわくわくしますよね。頭の中に鮮明に描くほど速く夢は実現します。そのために旅行したり、人に会ったり、本を読んだりして脳を刺激することが大切でしょう。

メンバーと一緒に歩くと教えられることが多く、感謝しています。仕事もNPO活動も両方あって楽しいですね。お陰でとても豊かな人生ですよ。

この頃はメンバーと本音で話せるようになった。

菊地茂プロフィール　１９５６年松島町生まれ。東北工業大学高校、東北学院大学法学部卒業。地方公務員、建設会社勤務を経て、１９９２年菊地行政書士事務所を設立。国際法務、経営法務を中心に許認可コンサルタント業務を行っている。２０００年、職親制度を利用して精神障がい者の就労支援活動を始める。２００３年NPO法人シャロームの会設立、翌年小規模作業所「アトリエぶどうの木」開設、２００６年、事務所名をシャローム行政書士事務所に変更、同年喫茶店「太陽とオリーブ」開店。

取材・文／南條成子　撮影／鈴木江美